



虹男



フエフキガエル

虹男

私はその男が法廷に現れた時、おやっ！と思った。どこかで見た風貌だと。しかし確信はなかった。男は強盗殺人の容疑者である。じつは私は見習いの弁護士で、先輩が担当する事件の裁判を傍聴席から眺めていたのだ。傍聴席は少し高いところにありフェンスの最前列に私はいた。だから、男の姿をはっきり見ることができたのだ。刑務官に連れられて戸口から現れた男は小太りで、子供のようにあどけない顔をしていたが、もちろん子供ではない。といって三十代なのか四十代なのか、これも判然としなかった。それは、ある特別な人たちに共通する風貌であったからだ。つまり遺伝子の異常によって生まれてきたのだ。

論告・求刑、男はその被告の席に着いた。強盗殺人は死刑か無期か二つに一つしかない重罪である。にもかかわらず、男は終始平然としていた。検察官が無期を求刑した時も、顔色一つ変えることはなかった。のみならず被告人による最終弁論の際、男は一言もしゃべることはなかった。ただうーうーとうなるだけだった。

被告の弁護人である先輩が、被告人は善悪の判断がつかない知的障害者であり、今度の件も罪の意識はなかったと弁護した。つまり罪に問えないと。

私はこの事件を詳しく知らない。というのは、私はつい最近まで東京の方で法律の勉強をしていて、郷土で起きた事件などに目を向ける暇がなかったのだ。それにしても先輩は被告人が真犯人であると認めたのだろうか、犯行を否定するようなことは一切言わなかった。私は男の最終弁論を見て、先輩は被告人との面会時、まともに話ができていないのではないだろうか、警察の調べだけを鵜呑みにしているのではないだろうか、という疑念を抱いた。そして私はこの時思い出したのだ。十数年前のあのことを。

当時私は小学校高学年で、県北の山里に暮らしていた。山里といっても近くにはちょっとした町があって、その町の親戚の家に私は預けられたのだ。じつは私はいじめられっ子で、学校に行くのを毎日嫌がった。それを見かねた私の親は一年間という決まりで親戚の家に私を預けたのだ。この親戚の家には子供がいなかったから私は歓迎された。実際ここでの暮らしは格別なものであったと私は思う。生まれて初めて自分の部屋を持つことができた。その部屋は二階の四畳半で、りんごの並木通りに面していた。このりんご並木は、この田舎町の誇れるものの一つだと私は思うが、数百メートルにわたってあり、なかなか洒落た雰囲気があった。

ある日の午後のこと、前夜から大量に降った雨が止み、太陽が輝き、いつしか空に虹がかかっていた。私は窓の外をぼんやり眺めていた。さっきも言ったようにこの部屋はりんごの並木通りに面しているので、通りを歩く人たちを眺めていた。すると向こうの方から帽子を被った小柄な男が、まるでロボットのように正確な歩行で、私の部屋の真下を、すたすたとまっすぐ前を向いて通り過ぎていったのだ。

この男は、この日に限らず、雨が止んで空に虹がかかると、いや、空に虹がかかっていようとしないと、雨後、空がからっと晴れば、いつもこのりんご並木通りを歩いて来た。男は常に帽子をかぶっていたが、その帽子の柄が虹だったこともあり、私はこの男を虹男と名づけていた。もちろん自分だけが分かるあだ名である。

いつしか私は、この男の姿を待ちわびるようになっていた。——雨が止んだぞ、空が晴れたぞ、さあもうじき虹男はやって来るだろうと。そして虹男は期待通りやって来た。そんな時、私は男に気づかれないように二階の窓から、こっそり男が来る方向を眺めるのだ。虹男は、やはりまっすぐ前を向いて、すたすたと歩いて来た。まんまるい顔をしていて、大人なのか子供なのかよく分からない風貌をしていたが、虹色の帽子をかぶっていたせいで最初子供かと思っていた。が、近くで見ると、といっても上から見下ろしただけだが、青年のようであった。

虹男は私の存在にまったく気づいていなかった。そればかりかこの通りには商店がいくつもあるのだが、脇目をふらず立ち入ることもなかった。男は林の方に姿を消した。その向こうは山になっていた。私は気になった。男はいつもどこから来て、どこに向かっているのだろうか。また雨が止んで空が晴れた時にしか来ないというのは、どういう理由なのだろうと。

その日も雨が上がって、空に虹がかかっていた。例によって虹男はやって来たが、その姿が向こうの方からだんだん大きくなってきた時、私はふと窓の外に顔を出した。そして堂々と虹男を見つめた。それは自分の存在を男に知ってもらいたいと思ったからだ。なぜなら、虹男は今まで一度も私の方に顔を向けたことがなく（もっとも私も男に気づかれないようにしていたのだが）それではあまりにも味気ないと悟ったからだ。

しかし、虹男は私が窓の外に顔を出しているにもかかわらず、まったく気づかない様子だった。で私は手を振ってみた。さすがに虹男は気づいたようだが、しかしちらっと私の方を見上げただけで、またすぐに視線を戻した。そして、私の前を平然と通り過ぎていった。私は遠ざかる男の背中を見つめ、しゃくにさわった。自分を無視されたように思ったからだ。この田舎に来て私が初めて受けた屈辱だった。-----ようし、今度虹男が来た時は、男の注意をこちらに向けさせて、機械のように歩いているその歩行を止めさせてやろう、私はそう決心した。

待ち望んだ日がやってきた。昼頃まで降っていた雨がパタッと止み、空がからっと晴れたのだ。きっとどこかで虹がかかっていることだろう。私はノートを一枚ちぎり、それをくしゃくしゃに手で丸めた。ボールのようにしたのだ。それは虹男が私の真下に来た時に投げるつもりでいたからだ。といって男に当てるわけではない。男の直前に投げて、注意をこちらに向けさせるだけなのだ。

何も知らず、虹男はやって来た。部屋の真下に通りかかった時、私は紙のボールをエイッと投げた。

手元が狂ったというよりも、男の歩く速度を測りそこねたのだ。紙のボールは男の横顔に当たった。男はパタッと足を止めた。私は凍りついた。しまった！という思いと、虹男はきっと怒るだろうと、心が怯えた。

虹男はゆっくりとこちらに顔を向けた。私は怒った顔を予想していた。ところが不思議なことに、虹男はニコリと笑ったのだ。まるで天使のような微笑だった。そして男は何も言わず、またすたすたと向こうの方へ歩いていった。

それ以来私は何度か虹男の姿を見たのだが、虹男は依然として私には無関心だった。あの時のことを根に持たないのはいいのだが、私はやはり淋しい気分だった。そして一年が経ち、私は街に戻った。虹男のことを考えることもなくなった。

傍聴席で私はその時のことを思い出して、帽子こそ被っていないが、あの風貌はやはり虹男に似ていると思った。しかしあの天使のように笑った虹男が、強盗殺人をするようには私にはとても思えなかった。これは何かの間違いではないのか。あるいは被告人は虹男ではないのかもしれない。そのことを確かめたかった。そして私はポケットから手帳を取り出すと、ページを一枚ちぎり手でくしゃくしゃに丸めた。

言うまでもなく、私は男が刑務官に連れられて退場する際に、この紙のボールを男の顔の前に投げてみようと思ったのだ。もしもこのボールが間違っただけで刑務官に当たれば、ひょっとすると公務執行妨害になるかもしれない。私は細心の注意を払い、男が私の目の前に来た時にボールを投げた。ボールは男の一メートル手前を横切った。私はほっとした。と同時に、男の顔を凝視した。男はつと立ち止まり、こちらを振り向いた。そして、あの天使のような微笑を浮かべたのだ。——虹男、私は心の中でつぶやいた。

閉廷後、私は先輩に叱られた。厳粛な法廷で紙のボールを投げたことを。私はその弁解をするために虹男の話先輩にした。そして言った。

「ですから私には、彼が強盗殺人をするようには、とても思えないのです。これはきっと何かの間違いです。——ところで先輩は、彼から犯行の時の様子を実際に聞きましたか？」

先輩は照れ笑いをしながら、「いや、彼はどうも話ができないらしい。知的障害者なのだ。だから今度の件はほとんど間違いなく無罪になるだろう。強盗殺人にもかかわらず裁判員制度が実施されていないのを君は不審に思わないかい。つまり形式的に裁判を行っているだけなのだ。検察の方もその気にいる」

「しかし」と私は言った。「彼が真犯人だという証拠があるのですか？」

「証拠、あることはある。ガラスの重たい花瓶だ。彼の指紋もついている」

「では、何を盗んだのですか？」

「金の十字架だ。君もさっき検察官が説明したのを聴いていただろう。容疑者がどんなことをしたか——」

私は言われて恥ずかしくなった。私は虹男のことで頭が一杯で、検察官の話を上の空で聞いていたのだ。確か教会というような言葉を言ったように思う。

「教会でしたかね盗んだのは？」

「ああ教会だ。その教会の牧師を殺害したのだ」

「その教会は〇〇郡にある教会ですか？」

「そう。君がさっき話した田舎にあるよ」

私はすぐに山の中腹にあるキリスト教の教会を思い浮かべた。大きくはないが、教会らしい尖塔のある建物だ。私は何度かこの教会を訪ねたことがある。十数年前のことだが、その時は若い牧師がいた。メガネを掛けたこの牧師は、私が教会の中に入ろうとすると、まるで野良犬を追い払うように手で払い除けた。「ここは子供の遊び場ではない、外で遊びなさい」この牧師に対して私は冷淡な印象しか持っていない。私が居候をしている親戚の人もこの牧師のことはあまり良くは言っていなかった。なんでも若い女性を教会に住まわせているという噂があった。あの時の牧師が殺害されたのだろうか。そういえば虹男は、いつもあの山の方向に向かって歩いていたのだ。ひよっとするとあの教会に行くのが目的だったのかもしれない。しかし、なぜ雨が止んで空が晴れた時にしか行かなかったのだろうか。日曜日でさえ雨の日は、男の姿を見ることはなかった。晴れていても、雨が止んだ後でなければ見ることはなかったのだ。

「先輩」と私は言った。「今度の事件、私が調査をしてもいいでしょうか？」

先輩はむっとしたようだった。新米に自分のやり方を馬鹿にされたように思ったのだろう。

「調査をするって何をだね。もうこの事件は終わりに近いのだ。あの男は罪に問われることはないだろう。今更事件を掘り起こしてどうなると言うのだ」

「もしも彼が真犯人でなければ、仮に無罪になったとしても、彼の名誉は回復しません。私は彼の名誉のために調査したいのです」

先輩はしばらく考えたのち、うなずいた。「いいだろう。君が納得するまでやってみなさい。しかしそれは判決公判までの間でだ。誰が見てもこれが真犯人だと分かるなら、私も弁護士の端くれだ。彼のために全力を尽くそう」

私は先輩に感謝した。そして、この事件の資料をすべて見ることができた。

虹男は〇〇郡の知的障害者の施設に暮らしていたのだ。私が一年間住んでいた町のすぐ近くだった。その頃はやはり青年で、以来ずっとこの施設で暮らしていたのだが、それは身寄りもなく他に行くところがなかったからだ。なぜなら、彼は捨て子だったのだ。

事件の概要は、じつに簡単だった。あの教会の礼拝堂から金の十字架（高さ二十センチ程度のものでキリストの磔刑がデザインされていた）が盗まれたのだが、その際犯人はこの教会の牧師をそばにあったガラスの花瓶で頭を強打したのだ。被害者の牧師はやはりあの時のメガネを掛けた牧師だった。この事件には証言者がいた。それはこの教会の信者の一人で、となりの町に住んでいる早苗という二十代の女性だった。証言者といっても実際に犯行を見たわけではない。その時早苗はとなりの部屋で聖書の勉強をしていた。牧師の悲鳴に驚き礼拝堂に出てみると、牧師が床の上うつ伏せで倒れていた。そばに大きな花瓶とその花瓶に生けていた白百合が何本か転がっていた。その場から立ち去ろうとした虹男を、早苗は引き止めた。

見ると虹男の手には金の十字架があった。それで早苗は、虹男がこの金の十字架を盗むために牧師を殺害したのではないかと判断して、すぐに警察に通報した。虹男は逃げもせず警察が来るまでじっとしていたという。

ここで私は、この早苗という女性が、すぐに救急車を呼んだのかどうか疑問に思った。警察に通報するのはいいが、その前に牧師がまだ息をしているのかどうか確認する必要があったのではないか。それにこの日は日曜日ではない。一般の信者が平日に教会を訪れることはあまりないはずだ。聖書の勉強をしていたというのなら、それもありだが、殺害された牧師の評判が評判だけに、私はこの早苗という女性が気になった。また虹男は警察が来るまでじっとしていたというが、この点でも虹男に罪の意識がなく、警察は早苗の証言だけを頼りにするしかなかったのだろう。

とにかく私は、実際に現場を確認する必要を感じた。私は子供の頃何度かその教会を訪れたことはすでに述べたが、中に入ったことは一度もない。牧師のいる時は追い払われ、いない時は鍵が掛かっていたからだ。

教会は寂れていた。事件があってから半年以上経っているのだが、未だに閉鎖されているようで、扉に鍵が掛かっていた。それで仕方なく私は礼拝堂の窓から中の様子を伺った。礼拝堂は事件当時のままに散らかっていた。牧師が倒れていたところが、白いチョークで記されていた。

私は早苗という女性に会って話を聞かなければならないと思った。といて、事件のことを聞くわけではない。そのことは、すでに警察が彼女から詳しく訊いたはずであり、それ以上のことを私にしゃべるわけがないからだ。その日の天気はどうだったのかを、私は聞きたかった。

私は月賦で買った中古の車で、となり町に住んでいる早苗の家に向かった。早苗は家にいた。家事手伝いをしているらしい。玄関口で私は、容疑者の弁護士のその後輩であることを告げると、早苗はさっと顔色を変えた。

「あの時にことでしたら、全部警察にお話をしましたから、そちらでお聞きください」と早苗は言った。

私はうなずいて、「その話ではありません。事件があった時の天気のことをお伺いしたいのです」

「天気!？」早苗は狐につままれたような顔をした。

「そうです天気です。雨だったのか、それとも晴れていたのか、そのことをお聞きしたいのです。覚えていますか？」

早苗はしばらく無言で考えているようだった。やがておもむろに、「晴れていたと思いますが、ただ記憶が曖昧なのです。というのは、確かその午前中まで雨が降っていましたから。じつは、私は自転車でいつもあの教会へ行くのですが、カッパを持っていこうかどうしようか迷った記憶があります」

「じゃあいつも自転車で通われていたのですか？」

「ええ」

子供の頃私が聞いた牧師の噂では、若い女性をあの教会に住まわせていることになっていたが、早苗はそういう女性ではなかったのだろう。質素な感じのいかにも聖書を読みそうな雰囲気があった。ただ終始おどおどした様子で、私は質問するのに忍びなかったが、大事なことだけは聞く必要があった。

「ところで虹男、いえ、容疑者ですが、彼はよくあの教会に来たのですか？」

「いえ、私も毎日行っていませんから分かりませんが、めったに来られません。日曜日の礼拝には一度も見かけませんでした。実際、教会の中にいたのは、あの時だけです。いつも外にいました」と言った後、早苗はアッと小さくつぶやいた。余計なことを言ったと思ったのだろう。

礼拝堂の中には入らない、ということは、-----私は子供の時の牧師に追い払われた記憶を思い出した。だが虹男は子供ではない。確かに知的障害者ではあるが、キリスト教はそういう弱者の見方になるはずで、牧師が拒む理由にはならない。私は、虹男は何か別の目的で教会に来ていたのではないかと閃いた。――雨が止んで空に虹がかかると男はやって来る。男の帽子は虹色だ。虹というのがキーワードになりそうな気がした。

「では、あなたは容疑者とそれまで話をしたことがなかったのですか？」

「ええ、話しかけたことは何度かありますが、あの方は返答をしてくれませんでした」

「なるほど、彼は話ができないということですね。――ところで彼は、教会の外でいつも何をしていたのですか？」

「さあそれは、私にもよく分かりません」

私はこれ以上彼女に質問する気はなかった。天気のことを分かっただけで十分だった。じつは私は早苗と会って話をしているうちに、今度の件は、私の子供の頃の疑問（つまり虹男が、なぜあの天候の時にだけ教会に来たのか）それが解明できれば、蒸し返さない方がいいと思った。なぜなら、確かに私は早苗を疑ったが、仮に早苗が真犯人であれば、それは何かの事情があったことであり、虹男が罪に問われないのであれば、この慎ましく暮らしている早苗の一生を台無しにする必要はないと思ったからだ。ただ私は虹男の名誉のために、一言言った。

「あなたは彼が牧師を殺害したと本当に思いますか？」

早苗は無言だった。

私は早苗に名刺を渡して礼を言い、次の目的地に向かった。その目的地とは虹男のいた施設である。

ブランコのある敷地に白色だが薄汚れた感じの二階建ての建物が、それだった。私は応接室で、ここの責任者と話をした。年配の責任者は、困った顔をして言った。

「彼がまさかあんなことをするとは思いませんでしたよ。ええ、今でもこれは何かの間違いだとは思っています。しかし、彼はしゃべれませんから、弁解もできないのです。第一金の十字架を盗んでどうします。彼は金品には全く興味のない人間だったのですよ。」

しかも牧師の頭をガラスの花瓶で叩いたと言うじゃありませんか。牧師の身長を私は知りませんが、彼は百五十センチほどしかないのですよ。どうやって叩くと言うのですか」

責任者は憤慨していた。その憤慨が収まるのを待って、私はこの施設での虹男の暮らしぶりをたずねた。

「じつにシンプルな暮らしですよ」と責任者は答えた。「簡単な作業をしてもらおうのですが、それも強制ではありません。気の向いた時にやってもらうだけです。彼は他の仲間ともあまり付き合いません。しゃべれませんから、話し合うことがないのです。一人でよくシャボン玉を作って遊んでいましたよ」

「シャボン玉!？」

「ええ、シャボン玉です」

私はシャボン玉を作って空に飛ばしている虹男の姿を思い浮かべた。そういえばシャボン玉にも虹ができるのだ。

「彼は昔、虹色の帽子をかぶっていましたが、あの帽子はどうしましたか？」と私はたずねた。

すると責任者は、驚いたように私の顔を見て、「よくご存知ですね。確かに彼は虹色の帽子をかぶっていました。何度も洗濯を繰り返して、かなり色が薄れましたが、ずっとかぶっていましたよ」

これで彼が虹男であることは確定したのだが、最大の謎である彼は何をしに教会へ行ったのか、そのことを私はたずねた。

「それは私にも分かりません」と責任者は答えた。「彼は雨の上がった後、よく出かけましたよ。行き先が決まっていたから、私どもも気にしていませんでしたが、-----ええ、よくあの教会へ行っていました。しかし、彼が聖書を読んでいる姿を一度も見たことがありませんし、本を読むこと自体、彼には難しかったのではないのでしょうか。キリスト教の信者というわけではなかったと思います。実際、日曜日の礼拝に出掛けることもなかったですから。いえ、日曜日に行くことはありますが、たまにです」

「その日も雨が止んだ後ですか？」

「ええ。彼は晴れたときしか外に出ません」

「空に虹がかかっていたか？」

責任者は笑って、「かかっていたかどうか私は知りませんが、とにかく彼は虹がとても好きでした。帽子の柄もそうですが、虹の写真集を一冊持っていて、それが彼の宝物でした。よく見ていましたよ」

まさに虹男——私があだ名をつけたのは正解だったのだ。

「あなたは弁護士だそうですからお尋ねしますが、彼は今後どうなるのですか？」と責任者は心配顔で言った。「無期懲役の求刑ですが-----」

「たぶん罪に問われることはないと思います」と私は答えた。「ただすぐには自由にならないかもしれませんが。特別の施設で監視がつくと思います」

「そうですか。それならいいですが、じつはこの仲間たちは大変心配をされていて、彼が死刑になるのじゃないかと。しかし心配はそれだけではありません。もしも無罪でここに戻ってきた時は、怖くて一緒に暮らせないというのです。罪の意識がなく人を殺害する者と一緒に暮らせないと-----」

私はその話を聞いて、言葉が出なかった。虹男のためには、やはり真犯人を見つけ出す他ないのかと。

私はこれ以上聞いても責任者には答えられないと思い、礼を言って、施設を離れた。

私はジレンマに陥っていた。今後、調査を続ければ、どうしても早苗を疑うしかなくなってしまう。といて虹男の冤罪を晴らしたい気持ちもある。

その早苗から、数日後連絡があった。私に会って話がしたいというのだ。私はすぐに車で早苗の家に向かった。早苗は家では話しにくいというので、近くの公園で話しましょうと言ったが、その公園に人がいたので、私の車の中で話を聞くことにした。

助手席に座った早苗は、顔をふせて「牧師の頭を花瓶で叩いたのは、じつはこの私です」と言った。

「どういう事情があったのでしょうか？」と私は穏やかに聞いた。

「牧師が突然襲ってきたのです。前々から牧師が私に対して想いを寄せていたことは気づいていましたが、まさかあんなことをするとは思いませんでした。牧師は私の後ろから抱きついてきたのです。狼のように荒い息をさせて。私は怖くなりパニック状態になっていました。じつは私には結婚を約束している男性がいましたから、彼のためにも汚されてはならないと必死に抵抗しました。そして教壇にあった白百合の花瓶を思わず手にとって、それで私の腰に手を回している牧師の頭を思いっきり叩いたのです。牧師はぼったり倒れました。彼と結婚式を挙げようと思ったこの教会で、私は殺人者になってしまったのです。それからの私は正気ではありませんでした。このことを何とかしてごまかさなければならいと、つまり自分以外の者の犯行にしようとして-----その時ふと、窓の外を見ますとあの方が、ぼんやりこちらを眺めていました。おそらく私の悲鳴を聞いていたのでしょう。私はその時閃きました。そうだ、この方を犯人に仕立てあげよう。私は以前あの方に話しかけたことがあり、その際、どうも私の言葉が分からないようでした。知的障害者だと分かりましたから、きっと何も弁解できないだろうと思ったのです。私はキリスト教の信者でありながら、悪魔のようなことをしてしまいました。あの方の手を引っ張って、礼拝堂の中に入れました。そして牧師の頭を叩いた花瓶を、あの方に持たせました。指紋をつけるためです。その後、金の十字架を持たせて私は警察に通報したのです」

早苗はそう言うと泣き出して、声を詰まらせながら話を続けた。

「私は罪深い女です。あれ以来あの方に対して、申し訳ないと思いながら、自分から警察へ行くことはできませんでした。あなたが先日私のところへ来られて、私は目を覚ました。その時あなたが私に仰った、『あなたは彼が本当に犯人だと思いますか?』その言葉が、私の胸に槍のように突き刺さったのです。あの方を悪者にして、私のがのほほんと暮らしていいのかと。-----私は決心しました。警察に行って本当のことを話します。どうぞ、このまま警察に連れて行ってください」

私はためらった。早苗の話聞いて私は同情したからだ。早苗の話が本当なら、早苗は偽証罪になり、懲役になるおそれがある。牧師を殺害しただけなら、正当防衛で無罪になる可能性があったのだが、虹男に罪を着せたのは何とも弁解のしようがない。早苗はもう反省している。元はといえば、牧師という聖職でありながら、信者である早苗に欲望を満たそうとした牧師が悪いのだ。神の罰を受けただけなのだ。私は早苗を助けたかった。

私はこのことを先輩に相談してみようと、早苗を連れて事務所に向かった。

事務所には先輩が一人いるのみだった。私は早苗を相談室に入れて、先輩と三人で話しをした。

「そうでしたか」と先輩は早苗の話聞いて、やはり同情しているようだった。「今度の事件は、もうほとんど終わりに近づいていまして、今から真犯人が現れたとなつては警察の方も困惑するでしょう。というより、警察は偽証というのをひどく嫌いますから、あなたに対して厳しい態度を取るかもしれませんよ。被告人となった彼には大変気の毒ですが、罪に問われることはないでしょうから、あなたは黙っていた方が今後のためになるでしょう。どうせあなたの証言だけが頼りですから警察も――」

先輩は今更今度の事件を掘り返す気にはなれなかったのだろ。しかし、真犯人が見つければ被告人となっている男のために全力を尽くすと前に言ったのだ。先輩もやはり私と同じようなジレンマに陥っていたと思う。早苗が男であれば、いや、同情を誘う事情がなければ、とっくに早苗を警察に引き渡しているか、自首を勧めたはずだ。

早苗は言った。「私はキリスト教の信者として、これからも生きていこうと思っています。ですから、本当のことを警察に行って話すつもりです」

「そうですか」先輩は言った。「では、引き止めませんが、-----宜しければあなたの弁護を私がしましょう。偽証罪は罪が重いです。しかし、あなたのケースでは、執行猶予が付く可能性があります。ところで、あなたは結婚を決めている人がいると言いましたが、その人には話したのですか?」

「はい。何年でも待つと言ってくれました」

虹男は自由の身となった。早苗が本当のことを警察で話したからだ。代わりに早苗は留置された。

やがて拘置所の方へ行くことになるだろうが、私と先輩は早苗が執行猶予を得るために全力を尽くす考えでいた。早苗がキリスト教の信者として、これまでずっと正しく生きてきたことを裁判官に伝えるために、早苗と交流があった人たちから話を聞いた。あの事件は牧師のせいなのだ。牧師が早苗を襲わなければ起きない事件であったのだ。そのことを熱弁したかった。

ある日、大雨が降った後、空が晴れた。法律事務所の窓から太陽が差し込んできた。私はふと虹男のことを思い出した。あの教会で虹男に会えるような気がした。私はポケットから車のキーを取り出すと、事務所を出た。

教会の駐車場に車を停めたが、虹男の姿はどこにもなかった。虹男はあの施設に戻っているはずだから、きっとここへ来ているにちがいないと思ったのだが。

私は車から降りて、散策した。この教会は山の中腹にあると前に述べたが、山肌は崖になっていて、岩がところどころ迫り出していた。

牧師の住居の裏に回った時だった。虹男がいた。虹男は見つめていた。山の上から雨水が滝のように流れ落ち、それが崖の途中にある岩にぶつかり、霧のように広がっていた。そこに大きな虹ができていた。その虹を見ていたのだ。この時私は諒解した。この水は雨が降らないと発生しないのだ。だから虹男は雨が降った後、空が晴れた時しか来なかったのだ。私は子供の頃からの疑問が解けて、心が急に軽くなった。虹を見つめている彼に声をかけた。

「きれいな虹ですね」

すると虹男は、ゆっくりとこちらを振り向いた。そして、ニコリと微笑んだ。 了